

## 2. 舞台技術各分野の概要

### (1) 舞台照明

舞台照明は、複数の照明機材を使用して、舞台上の空間的、時間的演出を行う分野である。

舞台照明の基本となるのは、「器具のセッティング」「負荷選択」「調光操作」である。

器具のセッティングとは、照射される光のシャープさや明るさの違う数種類の照明器具を、それぞれに照射方向、照射角度の広がり、色を設定し、舞台や客席の周囲に配置し、それぞれ決められた配線（負荷回路という）につなぐことである。

負荷選択というのは、セッティングを行った器具の光量を手元の調光操作卓で操作できるように、負荷回路と調光操作卓の回路とを組み合わせることである。

なお、照明器具の光量を実際に変化させるのは、器具に供給する電気を変化させる調光機という機器であり、調光操作卓で直接に変化させるわけではない。かつては、調光操作卓の各スイッチ（フェーダーという）と調光機との間の回路が固定され、負荷回路との組み合わせを行うことで、フェーダーと器具の関係を組み立てていたが、近年のホールでは負荷回路と調光機との関係が固定され、調光操作卓上で負荷選択が可能になっている。

調光操作というのは、舞台進行にあわせ、調光操作卓の操作によって、場面毎に順次、舞台の照明を変化させていくことである。簡易なものを除けば、今日の調光操作卓は、一旦、操作の手順を記憶させることで、同じ舞台照明の状況を簡単に再現することが可能であるが、予め場面毎の照明を作っていくという作業が必要である。

以上にあげた基本的な舞台照明のシステム以外にも、舞台照明には、様々の照明器具が使用される。客席後方に置かれて、舞台上の人の動きにあわせてスタッフが操作する器具をフォロースポットライトといい、ほとんどのホールには備えられている。

また、照射する形を設定できる器具、様々の模様を投射できる器具、さらにその模様を動かすことのできる器具など多様なものがあるが、いずれのホールにも備えられているという器具ではない。

また、近年は、器具自体の照射方向、広がり、色等の変化をリモコンで行うことのできる器具が普及しつつある。このような器具は、光の方向や色を変化させることを演出的に使用するという使い方がされている。

なお、客席照明、作業灯についても、舞台照明スタッフが操作を行う。

## (2) 舞台音響

舞台音響の役割は、主に「再生」、「拡声」、「録音」に分けられる。

再生は、あらかじめ録音されていた音を再生することによって演出を行うことであり、音楽や必要な効果音を録音したCD、テープ、MD等が素材として使用される。舞台周辺や客席に置かれたスピーカーの音量やタイミングを細かく調整することで、あたかも音源が任意の場所にあるかや、動いているかのようにコントロールする音像定位も再生の技術のひとつである。

拡声は、舞台上の音声をマイクで収録し、その音量を増幅してホール内に流すことであり、音源となる出演者や演奏家ごとにマイクを使うケースと、舞台全体の音声を拡声するケース、さらに両者を組み合わせるといったケースがある。また、ホールでの本来の反射音を変化させる建築音響の補正も「拡声」のひとつと考えられる。

使用される機材は、近年デジタル化が急速に進んでおり、より細かな調整が可能になっている。

劇場やホールには、音響操作室が備えてあるが、客席に音響操作卓を仮設することがよく行われる。観客と同じ音を聞きながら音響の操作を行うことが可能という要因と、音響機材、特に操作卓は上演団体が持ち込むことが少なくないという要因によってである。

## (3) 舞台操作

舞台操作は、舞台機構の操作や大道具類の転換を行う分野で、大きく「床機構」と「吊り物」に分けられる。

床機構は、迫りやスライディングステージ、回り舞台など、舞台床の一部を動かして、場面転換に使用されるものである。床機構はホールによって仕様が異なり、複数の会場で公演が行われる作品で演出上に使うことは難しい。また、稽古場で動きを再現することも難しいため、上演施設を使って稽古が行えるような場合以外には、演出的な使用は必ずしも多くない。そのため、貸館の多い公立ホールでは、仕込み作業の動力として使用されることもある。

吊り物には、大道具類や背景を吊して昇降させることで場面転換を行う美術パトン、舞台上の照明器具を吊り込むための照明パトン、各種の幕類、さらにはスクリーンや吊りこみ型の音響反射板がある。

吊り物には、手動のものと動力付きのものがある。手動のものは「綱元」と呼ばれる機構で操作され、カウンターウェイトと呼ばれる錘の着脱によって、パトンに吊り下げ

たものの重量とバランスをとり、綱を上下することで操作する。動力付きのものは電動式が多く、舞台操作盤のスイッチによって操作を行う。

床機構も吊り物も、操作を誤ると人身事故につながり、非常に危険を伴う分野である。

また、次項で述べるが、劇場やホールでの大道具の建て込みの際に共通して使われる用品がある。舞台の一部を高くするために使われる「平台」、高さを調整する「箱馬」や「足」、舞台床に敷かれる「地かすり」、平面的な大道具を自立させるための支えである「人形立て」などであり、舞台操作分野がこれらの備品の管理や運用も行う。

また、公立ホールでは、様々の演目に使われる用品を備えることが多い。日本の伝統芸能に使われる所作台、金屏風、もうせん、さらには講演用の演台など、これらの用品も舞台操作分野で管理と運用を行う。

#### (4)大道具・小道具

大道具に加え、小道具、背景幕等は舞台美術を構成する重要な要素で、シーンごとに舞台全体が計画、作成される。

大道具は「舞台装置」と呼ばれることもある。舞台床への敷物、舞台の一部を高くすること、幕に描かれたり、立体的に組み立てられたりする舞台の背景など、視覚的な演出効果を担う。

かつては、大道具は「木」や「紙」を主体として作られてきたが、現在では金属や合成樹脂素材なども多用されるようになってきている。

モノとしての大道具の製作を行う分野として「大道具」があり、舞台上での組立や転換時の移動も行う。

小道具とは、机や椅子といった類のものから、俳優が演技上に使用する小物まで、舞台上に置かれ、また移動させて使われる道具類のことをいう。

モノとしての小道具を、調達、製作する分野も、そのまま「小道具」と呼ばれる。舞台上でよく使われる小道具類をそのまま借りてくる場合もあるが、特定の舞台作品にあわせてデザインされ、製作される場合もある。大がかりな舞台作品では、ホールで小道具係のスタッフが、進行にあわせての小道具の出し入れ、修理・調整などを行う。

## (5) 舞台監督

舞台監督は、制作段階では各分野のプランニングの調整、稽古から上演に至る間で必要なモノの製作のスケジュールや進行管理を行う。

また、上演段階では、搬入から退館にいたるまでの当日のタイムスケジュールを作成し、進行を管理する。公演時には、各きっかけの指示を与えて、舞台進行の管理を行う。

このように、舞台技術分野全般に対し、その内容を把握し管理を行うとともに、出演者に対してもきっかけの指示を出す。また、利用団体を代表して、ホール付きの技術者との打ち合わせや、上演に関わる物理的与件の調整を行うのが舞台監督であることが少なくない。

なお、このような「舞台監督」の役割は日本独自のものといえる。諸外国では、舞台監督に相当する「ステージ・マネージャー (stage manager)」は、あくまで上演時の舞台技術分野の進行管理のみを行うことが一般的であり、日本の舞台監督が担う制作時の役割は、「プロダクション・マネージャー (production manager)」といわれるスタッフが行う。

## (6) 技術監督

我が国では、現在のところ必ずしも一般的に見られる役職ではないが、劇場やホールには技術監督を置くべきであるという意見があり、新しい劇場・ホールでは、実際に置いている施設もある。

舞台技術分野には、舞台照明、舞台音響、舞台操作などが含まれているが、劇場やホールでの舞台技術面の諸問題について総括し、内部の事業、制作、総務、あるいは対外的にも、技術部門を代表することがある。

## (7) その他

舞台衣裳を扱う分野は「舞台衣裳」あるいは「衣裳」といい慣わされている。衣裳をそのまま借りることがある一方、特定の舞台作品のために衣裳がデザインされ、製作されることもある。大規模な公演では、専門家の舞台衣裳係が楽屋で衣裳の管理や調整、着付けを行う。

メイクとは、舞台用のメイクアップを行う分野であり、アマチュアや小規模な公演を除いては、専門家が楽屋でメイクアップを行う。